

きる。

Satellite Data Service Division, NOAA/EDIS/NCC,
Room 606, World Weather Building, Washington,
D.C., 20233, U.S.A.

また、北半球 500, 100, 30 mb などの資料は気象庁長期予報テクニカルノート、季節予報資料に掲載されている。また、5日、30日、90日の平均の南半球高層資料は1977年10月から長期予報課で作成されている。



福井英一郎, 吉野正敏 編
気候環境学概論
東京大学出版会, 1979, 菊版,
259頁, 2800円

環境と人間の関係というテーマは、地理学の伝統的な柱の一つであった。しかし、今世紀初頭に唱えられた環境決定論は、あまりにもそのインパクトが大きくて、地理学のみならず多くの分野で、環境のことを論ずるのがタブーになったほどであった。気候学にしても、環境科学としてよりも、大気科学として発展してきたといえよう。一方、農業と気候、建築と気候、疾病と気候などについてはそれぞれ違った分野で研究が進み、すぐれた成果の蓄積がなされてきた。

本書は、そのはしがきにあるように、「“人間と気候” というようなかなり広い分野での今日までの成果を系統的に整理検討」しようという意図で、地理学者によって編まれたものである。

本書は4章からなっており、第1章「近世までの気候環境論」には、ギリシア・ローマ時代とともに、上代日本の気候観が紹介され、近世の環境論が簡潔に語られている。

本書の主要な部分は、「人間と気候環境」と題された第2章である。日本の気候地域と生活、衣服気候、食品需要の季節変化、住と日照など、日常生活と密着する気

候は一般読者にとっても興味の尽きないところである。この章はさらに、風力、水力、太陽熱などエネルギー資源としての気候、農業・工業・観光業などと気候との関係、都市気候環境と多岐にわたる問題を取り扱う。最後に、地域計画と気候を取り上げ、環境評価の重要性を強調している。

第3章「人間と気候の将来」では、気候変化の研究成果をふまえて、時間的にも空間的にもスケールの大きな議論を展開し、気候改良や人口・食糧問題に関しても21世紀に目が向けられている。

第4章は9人の執筆者全員の論点を整理した「まとめ」である。研究と教育に豊かな経験をもつ執筆者による気候教育総合案、気候学の行政への寄与、気候学の研究組織などは力強い提言として、傾聴に値する内容を持っている。

通読してみると、部分的に異質な記述がないとはいえないが、多くの示唆に富む将来への展望を含んでおり、本格的な気候環境学の体系化を目指したものとして評価したい。

ただ、環境論は決定論と可能論で終わったわけではなかった。地理学と文化人類学の歴史は、決定論に対する深刻な反省と、それに代わる方法論の提示の歴史であったともいえる。そのことに言及されたならば、もっと奥行の深い環境学の一部門として、気候環境学が確立することになるに違いない。(中村和郎)